

情報処理教育

教養部長 今井敏信

来る7月28日に本学の情報処理センターが総合情報処理センターとして発足し、一段と機能が充実されるようで、弘前大学の将来にとって悦ばしいことと存じます。国際情報化時代に対応し、溢れる情報の処理が必要な昨今にあっては、情報処理に関する教育・研究は不可欠の要素となっていることは言うまでもありません。

本学における「情報処理センター」の沿革（HIROIN No.1）をみると、1967年に計算センターが発足し、1985年に「情報処理センター」への改組とともに「ACOS」時代に入り、さらに今回「総合情報処理センター」へと格上げされました。この間、満27年の歳月を要しましたが、情報処理の重要性が叫ばれる今日、時宜を得たことと言えるでしょう。

教養部では1986年度に、当時の明石教養部長の意向で、情報処理センターへの改組に合わせて、情報処理教育として「情報科学（自然分野）」が開講された。授業としては当初1コマの開講であったが、翌年情報科学の専任教官が着任し、4～5コマの開講に拡充され、1994年度は8コマの開講となっている。さらに、1989年度から1992年度まで、総合科目として情報科学が開講された。この間、全学的情報処理教育の必要性から1991年1月大型計算機ACOS930の導入された時、教養部に教育用端末41台からなる情報処理実習室が設置された。これにより情報処理教育は一段と充実された。他方履修学生数をみると、自然分野情報科学のそれは当初は約110名であったが、翌年から増加して約130～200名となり、1994年度は約410名となっている。また、総合科目情報科学のそれは当初約180名であったが、1993年度には約230名に増加した。両科目の履修学生数を1992年度についてみると、一年次学生の40%以上に相当する。

教養部における転出した担当教官の採用保留や総合科目情報科学の開講中止はあるものの、総合情報処理センターの開所、教育用端末機の拡充など、より多くの学生に履修機会を提供するセンターの努力は、これからの弘前大学における情報処理教育を大いに前進させることでしょう。加えて、情報の多様化、高度化に対応して、1995年度から実施される共通教育においても情報科学が開講されることになっている。これは講義と実習（情報処理）から成るが、このうち情報処理（2単位）が全学生必修となっており、その授業実施に向けて開講準備を進めております。

かって手回しの計算機で統計処理をしていた学生時代を思うと、昨今の機器の進歩の早さには目を見張るばかりです。筆者と「コンピュータ」との出合いは、本学の「OKITAC」時代に統計処理を依頼したことに始まるが、自分で直接機器に触れたのは、北大への内地留学時（1985年）に大型計算機センターの「HITAC」でSPSSを利用した計算でした。このため、当初本学の「ACOS」と「HITAC」との使用言語の違いが煩わしく、また統計処理をSPSSからSASへ切替えようと思いつつも、これらに時間を割くことができなくなり現在に至りました。今日では、何よりも時間をかけてプログラムを組むことができるような環境を、切望している次第です。